

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | <批評・紹介>中華民国三十年史(岩波新書) 橘樸著   |
| Author(s)   | 丸山, 静   |
| Citation    | 東洋史研究 (1944), 8(5-6): 343-345   |
| Issue Date  | 1944-03-15  |
| URL         | <a href="http://dx.doi.org/10.14989/145803">http://dx.doi.org/10.14989/145803</a> |
| Right       |   |
| Type        | Journal Article   |
| Textversion | publisher   |

釋と企圖とがあつたからである。以上の考察を前提として、天之日矛の歸化傳説の記載を記紀の年代史觀に即して考へられた結果、年次に關する諸説の年系譜のみに重點を置く孝靈説よりも、自己の時代觀的背景を顧慮しつゝ他の諸事項と關聯せしめることによつて年次を求めた書紀により多くの史學的價值が認めらるべきであるが、更に、神功皇后の新羅征伐といふ古傳承に據所を求めた古事記の説にはより以上の價值あることを決定されたのである。「かぐや姫の本質に就いて―竹取物語素材の研究―」は「傳承文學から記載文學への過程を逆に辿り、その民間傳承としての原形態を素材の形に於いて把握し、民間傳承に相應はしい原初的意味を理解」せんとされたもの。波多江種一氏の研究は單に部分的な類型の探索に終始し、全説話の構想が省みられぬ缺陷があつたが、本篇はそれを補足する意味をもつ、先づ赫映姫の生ひ立ちが問題となるが「竹の中の姫」なる種差的特徴が最初の目安とされる。竹筒から美女が出現するといふこと、竹筒から生れることの意味を考へられる。そこで「なよ竹の赫映姫」と呼ばれた意味の考察の結果、赫映姫は光る子であり天の御子であることが、明らかにされる姫が光る竹・籠により人となつたことは天の光る子の降る過程を示すわけであるがこゝに光る天の御子の依代としての竹の意味が考へられてくる。竹取翁の名も想起されるが、この名からは議論を進め得ないため、物語の内容から翁の特性―竹から籠を作つた、天の光る子を籠に入れて養つた―を抽出し、之によつて考察を進めら

れる。籠と神の子との神話の土俗的關係依代としての籠の土俗、天の御子降臨の神話が考へられた結果、竹取翁の名も籠を作つてゐたといふことも、その原初的な意味は天つ神の依代としての籠を造つたのではないか、竹取翁は從つて聖業者ではない、かと想定される。生立ちの考察に續いて昇天の形式にも觸れられてゐる。補遺の中に採集された、南方諸民族の説話傳説は竹の中より始祖の生誕する要素を含み、日鮮傳説との比較研究を促す。我上代文化に於ける南洋要素の問題は夙に松本信廣教授の採上げられた所であり（日本上代文化と南洋）、三品先生は近稿「滿鮮諸族の始祖神話に就いて」に於いても卵生型神話の分布が朝鮮からマライシャ方面に亙ることを説かれてゐる。南方要素の問題は決して閑却され得ないのである。

以上、先生の新著に對し、淺學の身をも顧みず妄言を弄した。それは私の理解し得た限りに於いてのものなのであり、幸にして誤解なからんことを祈るのみである。（岡崎精郎）

### 中華民國三十年史（岩波新書）

橋

横 著

このむやみに手際よく要領のよい書物を手際よく紹介し、要領よく批評するなどといふ藝當は、どう考へてみても、いまの僕がよく爲し得るところではありません。それでもどうかと紹介を引受けてしまつたからには、何とか書かねば相成らぬと思つて、實はこの數日沈思熟考を重ねてみました。併し要するにこの書物は皆さんに第一頁から終りの第二百七頁まで、克

明に讀み丁寧に考へていたとく外はないといふ、極めて尤もな結論に達せざるを得ませんでした。それほどにこの書物は、見たところは可憐だが、中味はどうして、斬れば血の出るやうな抜き差しならぬ我々自身の第一義的な問題が、これまた斬れば血の出る切實な論理によつて、見事に展開せしめられてゐるのであります。

斬れば血の出るやうなと申しましたが、併し決して淺慕な形容の心算ではありません。何しろテーマは「民國三十年史」です、つまり世界の一切を押流して否應なしに今度の戦争にまで持つていつてしまつた、何ともかともすさまじいこの三十年のそれも他の何處よりも緊密に相結ばねばならぬ間柄であるのに現に我々が相手として戰つてゐる支那の歴史です。歴史といふには餘りにも生々し過ぎませう。そのうへ僕もまた當年とつて三十になる、義理にも歴史などといつて突放してしまへない、烈しい内面の動搖を感じるのであります。おそらく僕自身もまた、支那と共に、この三十年の歳月に流され通しに流されてきた、そして烈しく揉まれてきた。歴史家などと澄し返つて、顧みて他を言ふ餘裕などあらうはがありません。

併し考へてみるに、歴史家とは多少は顧みて他を言はざるを得ないものでせうか。といふより、顧みて他を言はなければ、歴史の學は成り立たないものでせうか。嚴密さといふことが歴史學の必須の前提ではあるにしても、その嚴密さは生々しい時代感覺を犠牲にしてまで獲得しなければならぬものであるなら

うか。例へば本書の百五十五頁に

「日本は米英の政策に倣ふには、政治的に、經濟的に、軍事的に、あまりに支那と密接な關係にあつた。英米にとつては支那は要するに大洋の彼方にある市場に過ぎなかつたが、日本にとつては、支那は經濟上、國防上の生命線であつた。」

とある一節の如きは、これは嚴密な言葉とは言へないだらう。寧ろ我々自身の胸中に燃える素朴な實踐的な決意といふに近いであらませう。この「民國三十年史」を貫く論理は要するにこの素朴な實踐的な決意に外なりません。いひかへれば著者は所謂歴史家としての立場を踏み超えてをられる。それは必ずしも著者が社會學出身であるからではなく、歴史であるには餘りにも主題が生々し過ぎるためであり、著者の時代感受性が顧みて他を言ふためには、餘りにも潑刺としてゐるためでありませう。さうして著者の胸中のざりざりのところには、日本の運命に對する美しい悲願が戰慄してゐるからであります。

民國の三十年の歴史とは、畢竟するに、世界の諸列強がそれぞれの政治的、經濟的、軍事的意欲によつて、互ひに相せめぎ相結びながら、それぞれの「民國三十年史」を書いた歴史であるとも言へませう。リヒトフオーフェン・バック、ワグナー、マジャール、ウイットフォード等々、この人々はみんなそれぞれの「民國三十年史」を書きました。而して我々日本人の任務は、この人々の書がすべて無用に歸してしまふほどに、普遍的にして根本的な支那の歴史を書くことに在りませう。その道

は悠遠にして險阻であらう。併し我々の胸に日本の運命への止み難い悲願がおののいてゐる限りは、この悠遠にして險阻な道にもまた自らにして拓かれる通路があるにちがひありません。

(丸山 靜)

## 支那歷代風俗事物考

尙 秉 和 著  
秋 田 成 明 譯

昭和十八年八月三十日 大雅堂發行  
A 5 判本文五一七頁 賣價七圓八拾九錢

長友秋田成明君の好譯を一讀して支那史の廣々とした展望が眼前に新たに鮮明な姿をもつて開かれた感じがした。と云ふのは假りに「支那近世一士大夫の生活」をとても題して或る貴族の傳記を綴るとしたら、彼が一體どんな邸宅に住み、その部屋はどんな色彩をもつた如何なる種類の調度で飾られ、彼はどんな服裝に身を正して朝廷に出仕したり、同僚友人と飲宴したであらうか、その道路や會合の席の様子はどんなだつたかなどについて、繪巻物を心の中であるべく明確にくりひろげられなければならない、無味乾燥な史書の文字を通してだけで時代を隔て民族を異にし風土の違つた一人の人間の生活の外面にさへ觸れにくいであらう。

前清の進士で幼時から清朝の風俗を見聞する機會があり、長じて民國の際中國大學教授としてこの他に「歷代社會狀況史」等の著述で知られる尙氏の原著「歷代社會俗事物考」四十四卷は私は未だ見てゐないが譯者序文によるとかなり大部で項目の

出入もあり、若干出典の誤脱もあるらしい。秋田氏の譯書は異同を裁正し二十章に壓縮し、その上必要な註記と理解を大いに容易ならしめてゐる挿圖多數を加へたものである。中になほ重複する記事の存在するのは實に原著者が一の史料を多方面に活用し古人の生活を彷彿させんとした努力の跡を示すものに外ならぬ。二十章の題目は、三代以前(傳說時代)の社會狀態、衣服、飲食、住居、燈火・薪火、車駕、都市・村落、祝祭、俗信仰、教育、婚禮、喪葬、敬禮・敬稱・訴訟、及び官吏、平民の仕官・納税、經濟・旅行・軍事、各種の遊戲、社會雜事、妓女であり、冒頭した如く、古人(勿論古代から清末に及び現狀にもふれる所があるが)の全生活面を浮び上らせる効果がある。

原著についていへば、上古の傳說的史料や周禮の記述を批判を加へず直接的史料として扱つてゐるらしい態度が先づ氣にかゝり、風俗慣習の理由の説明などに稍々腑に落ちぬ個所があるのを感じる位である。「歷代社會狀況史」のかなり難しい典故にうづまつた活版の漢字を讀むのには辛抱を要した。今この著を増補した本書の譯篇においては平易にしてかつ正確な譯解、淡々としてしかも興味つきぬ行文により、恐らく原著よりはるかに樂な氣持で支那民族の生活に入つてゆかれる思ひがする。地理的年代的考證や、制度組織の煩瑣な一面や、統計の數字で能事たりと考へやすい一般東洋史家はもとより、一般支那に心をよせる讀者の味讀に値ひする良書として心から本書の刊行を喜ぶと共に推奨の辭を惜まぬものである。(宮川尙志)